

# ADHDの診断がある中学3年の生徒に対して、見通しを持たせたり、自分の行動を考えさせたりする指導を行い、学習面・生活面において改善がみられた事例

## 1. 事例の概要

A生徒は、B中学校の通常の学級に在籍する中学3年の生徒である。保育園年長児より、ことばの遅れと落ち着きのなさが確認されており、小学6年まで、ことばの教室で通級による指導を受けていた。ADHDの診断があり、注意散漫で、集団場面では、自分の思い通りに活動が進まないと話合いに参加しないことがある。文章の読解や作文など自分の考えをまとめて順序立てて書くことも苦手である。相手の気持ちが読み取れず、他の生徒とトラブルになることもある。

そこで、A生徒が課題に集中できない時は、理解を確かめた上で見通しを持たせる声掛けを行ったり、周囲とA生徒のやりとりが生まれるように促したり、A生徒がとった行動を指導するのではなく、なぜそうなったのかじっくりと聞き、今後どうするべきかを整理しながら、A生徒に考えさせる指導を行った。

その結果、生活面では他の生徒とのトラブルがほとんどなくなり、学習面では、落ち着いて取り組むことができるようになり、グループ学習や話合いでも、他の生徒の話を聞きながら、自分の意見もしっかりと答えられる力がついてきている。

**キーワード** ADHD、見通し、気持ちの切り替えと振り返り、コミュニケーション

## 2. 児童の実態

A生徒は、B中学校の通常の学級に在籍するADHDの診断がある中学3年である。授業では、指示を受けてから周囲の様子を見た後に取り組み始める様子がよく見られる。また、取り組み始めても注意の持続が難しく、注意散漫である。集団場面では、自分の思い通りに活動が進まないと話合いに参加しないことがある。文章の読解や作文など自分の考えをまとめて順序立てて書くことは苦手である。

困難さが露見されることを避けるためか、他の生徒とコミュニケーションをとろうとはしない。しかし、興味のあることについては、他の生徒に積極的に話しかけて関わろうとするが、距離をとったり相手の気持ちが読み取れなかったりすることがあり、他の生徒とトラブルになったり、敬遠されたりする様子も見られる。

## 3. 本事例に関する基礎的環境整備

- A生徒の中学校への入学にあたり、小学校からの個別の指導計画を活用した引継ぎや、ことばの教室からの引継ぎと、集団場面、個別場面で必要な指導や支援についての情報が提供された。【基礎1】
- A生徒の学習状況や、その時点で最も大きな課題について共通理解できるように記録を共有している。【基礎2】
- 各教科における個に応じた指導や学びの場の設定については、担任、合理的配慮協力員やことばの教室指導担当からの情報を得ることができ、よりの確な実態を把

握し、巡回相談員による授業参観、保護者面談と諸検査実施によりアセスメントを立て、実態に応じた支援がスムーズに実施できる体制を整えている。【基礎7】

#### 4. 合意形成のプロセス

A生徒の思いや行動の背景を考えながら支援を進め、保護者と相談しながら関係を築いてきた。A生徒は、中学校入学後は他の生徒とのトラブルが頻発し、その都度、家庭との連絡、協力をしながら支援をすすめてきた。問題が起きた時以外にも、定期的に家庭訪問や電話による連絡をしたり、連絡帳を活用したりすることで、A生徒の学校での様子を家庭が十分に知る機会を設定し、家庭との連絡をとるようにした。その結果、「子育てを共に考える」というスタンスで保護者とA生徒への支援について合意形成に至った。

#### 5. 合理的配慮の実際

- 課題に集中できない時は、理解を確かめた上で見通しを持たせる声かけを行っている。また、苦手な算数の文章題や国語の読解では、担任や支援員が側でヒントを出すようにしている。【合理①-1-1】
- 「英語」のグループ活動で、A生徒が課題の答えが導き出せなかったときには、「一人で解決できないときにはグループの人に相談する」「それでもわからなかったら、先生に尋ねる」という相談のステップを伝えることで、学習を最後まで継続することができた。【合理①-2-1】
- A生徒は、計算スキルが高いので、授業中に活躍の場を意図的に設けた。正答が出せた時には、全体の場で評価し、自分ができていることの自覚を促した。【合理①-2-3】
- A生徒がとった行動を指導するのではなく、なぜそうなったのかじっくりと聞き、今後どうするべきかを整理しながら、A生徒に考えさせる指導を行っている。【合理②-1】

#### 6. 本事例の成果と課題

生活面では、他の生徒とのトラブルがほとんどなくなった。特に、休み時間や授業中なども細やかな配慮をすることによって、些細なけんかもなく楽しく生活することができている。学習面では、落ち着いて取り組むことができるようになり、グループ学習や話合いでも班のメンバーを工夫することにより、お互いの話を聞き合いながら、自分の意見もしっかりと答えられる力がついた。苦手としている作文では、書き始めを一緒に考えたり、事前に作文の資料を提供したりすることによって、最後まで書ききる力がついた。

A生徒は、コミュニケーションの取り方を様々な状況に応じて学ぶことができたが、学習面の苦手さは依然として見られる。今後はそれに対する自己理解や対処法を身につけることが求められる。